

vol.

18

Sep.2024

市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI



長持の中に保管されている資料を確認している様子 (令和6年(2024)6月撮影)

市史編さん室では、これまでも多くの方々のご協力のもと、資料の調査を進めてきました。調査では、資料の内容について調べることに同じように、資料がどのように残され、保管されてきたかについても調べてきました。そこで今回の特集では「現状記録 ―資料がたどってきた歴史を探るために」と題し、資料の残され方を調べる「現状記録」について、実際の調査の様子とともにその意義を紹介します。

「資料をよむ」では「砂川家文書からみる戊辰戦争」と題し、民衆の視点から見た戊辰戦争期の江戸周辺地域の様子を「精勇隊事件関係文書」の例とともに解説します。

このたび、新編立川市史編さん事業は期間を延長することになりました。これに伴い変更された刊行計画についてご報告いたします。

目次

・新編立川市史編さん事業期間延長のご報告	2	・令和6年4月～令和6年9月活動報告	11
・令和5年度関連展示のご報告	2	・令和6年度市史編さん関連展示・講演会のお知らせ	11
・部会短信	3		
・特集 現状記録 ―資料がたどってきた歴史を探るために	4～7		
連載			
・資料をよむ ―砂川家文書からみる戊辰戦争―	8～10		
・立川おっこぼれ話 「観察」からわかること 現状記録とスケッチ画	12		



新編立川市史編さん事業期間延長のご報告

新編立川市史編さん事業では、新型コロナウイルス感染症の流行等の影響に鑑み、事業期間の延長を検討してまいりました。このたび、立川市史編さん委員会及び立川市史編集委員会議のご意見を踏まえ、事業期間を4年延長し、令和10年度まで事業を継続させていただくこととなりましたのでご報告いたします。

改訂版・新編立川市史刊行計画（刊行年度は変更になる場合があります。書籍名は予定）

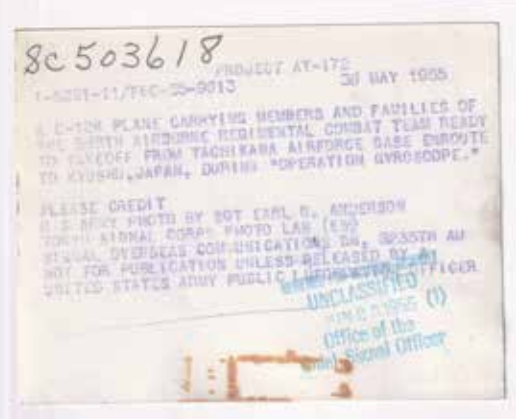
刊行年度	書 籍 名
令和6年度	資料編 近代1 資料編 現代2
令和7年度	資料編 近世2
令和8年度	本編 通史（下）近・現代、別編 民俗・地誌編
令和9年度	本編 通史（上）先史～近世
令和10年度	別編 近代テーマ編、現代テーマ編、普及版



令和5年度関連展示のご報告

令和6年（2024）3月1日（金）から7日（木）まで立川市役所1F多目的プラザで、3月18日（月）から31日（日）まで女性総合センター・アイム1Fギャラリーで、合計21日間にわたり、令和5年度の市史編さん関連展示「立川基地のすがた——米国国立公文書館所蔵の写真から」を開催しました。展示には、令和5年度に株式会社ニチマイに委託し、アメリカ・メリーランド州にある米国国立公文書館新館から収集した写真資料を使用しました。

米軍の将兵が使用した住宅・映画館などの立川基地の施設や、基地を訪れた要人、基地に運び込まれた装備など、昭和20年代～30年代の基地内の様子を伝える写真21点を抜粋して展示しました。市内外から多くの方にご来場いただき、盛況のうちに終了しました。



- （右上）立川基地に駐機するC-124輸送機
- （右下）上の写真の裏書き。被写体の情報や撮影者、公文書としての取扱いの説明などが書き込まれています。（ともに米国国立公文書館所蔵）
- （中上）立川市役所1F多目的プラザ
- （中下）女性総合センター・アイム1Fギャラリー
- （左）展示パネルの例。写真の裏面に書かれた文章や、時代背景の解説も付しました。



先史部会

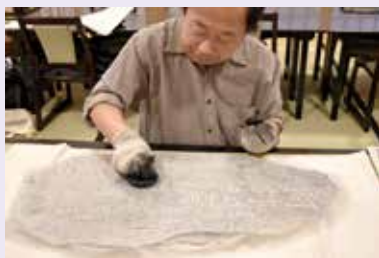
現在、市史編さん室では、『資料編 先史』をはじめとする『資料編』を9冊、『調査報告書』を7冊刊行しています。昨年頃から、歴史・民俗系学会で対面による大会が再び行われるようになったことから、立川市外でも市史編さんの周知活動を再開しました。今期は、5月に行われた日本考古学協会大会と歴史学研究会大会に参加しました。7月に行われた日本動物考古学会大会では、『ちかわ物語』17号で紹介した中野家旧蔵のツルの骨について発表しました。市民の皆様のご協力を得ながらまとめた成果は、立川市外の方々にも高い関心を持っていただいています。



日本動物考古学会での発表の様子

古代・中世部会

本編作成に向けた石造物調査を進めています。青梅市の宗泉寺では15世紀に関東地方などで使われていた私年号「福德2年(1491)」の銘がある板碑等4基、東久留米市の大円寺では東久留米市指定文化財の永正13年(1516)の銘がある月待板碑1基を調査しました。板碑の拓本を採り、高さ・幅・厚さを測り調査を作成しました。他には江戸東京たてもの園にある板碑の調査も進めています。立川市内外の主な石造物調査の成果は調査報告書『古代中世の考古・石造物・美術工芸』や、1月に開催した市史編さん関連講演会「中世立川の石造物」でも紹介しました。



大円寺(東久留米市)での調査風景

近世部会

『資料編 近世2』の刊行に向けて、砂川地域のお宅を訪問しながら古文書の調査を続けています。

近世後期の多摩地域の特徴の一つに、在村武芸の興隆が挙げられます。特に新撰組でも有名な天然理心流の剣術は、砂川村や柴崎村でも稽古が行われていました。砂川村では九番に天然理心流の道場があり、村や地域の人々に剣術を教えていたことが知られています。当時の文化や幕末という時代性を考える上でも大きなトピックです。

今後も史料調査は続けてまいりますので、ご理解ご協力の程お願い申し上げます。なお今号の特集記事でも調査についてご紹介しておりますので、ぜひご一読ください。



天然理心流の免許(個人蔵)

近代部会

『資料編 近代1』の刊行に向け、掲載する資料を選び、原稿化する作業を継続しています。併せて、市史編さん室に寄贈された資料の整理のほか、東京都公文書館・西東京市中央図書館といった公共機関や市内旧家などでも資料調査を実施しました。さらに立川市歴史民俗資料館において寄贈された文書群の整理や掲載資料の原本の確認も行っています。

写真は、立川市歴史民俗資料館で原本確認中の資料の一つです。砂川村・立川村が神奈川県管轄であった明治12年(1879)の資料で、砂川村の願書に対する神奈川県の回答が、「聞届候事」と朱筆で書かれています。



朱筆で記された文書と神奈川県令印影(旧砂川村役場文書/立川市歴史民俗資料館蔵)

現代部会

『資料編 現代2』の刊行に向けた編集作業は、いま佳境に差し掛かっています。多くの資料のなかから掲載する資料を選定すると同時に、立川市内外の資料保存機関での補充調査も進めています。

また、市民の皆様から寄贈された資料の調査も、継続しています。この間、新たに見つかった自治会報には、地域の生活に密着した記事が載っており、地域の歴史を伝える貴重な資料といえます。

一方、昨年度に続き実施する米国国立公文書館の調査では、立川基地に関する公文書や写真・地図などを収集する予定です。それらの成果も、今後の編さん事業を通して反映していきます。



とのがや自治会だより(昭和58年5号・6号)

民俗・地誌部会

令和2年(2020)3月に刊行した『柴崎の民俗』は、皆様のご好評をいただいたこともあって、残部僅少になりました。そこで、今年9月に第2版として増刷いたしました。令和5年度に刊行した『砂川の民俗』と併せて、お手に取っていただければ幸いです。

現在、令和8年度に刊行予定の『別編』に向けた調査を進めています。祭礼調査や聞き取り調査だけでなく、地誌の編さんに向けて文献調査も随時進めています。今後も皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。



『別編 民俗・地誌編』の構成案の検討の様子

現状記録 ―資料がたどってきた歴史を探るために

市史編さん室では、博物館・図書館・文書館などの公共機関だけでなく、市内外の個人のお宅でも調査を行っています。調査では「どのような資料が残されているのか」はもちろん、「どのように資料が残されているのか」についても注目しています。今回の特集では、資料を調査する際に大切な「現状記録」について解説します。

資料は「まとまり」が大切！

調査では、過去のできごとがわかる情報が含まれているものを探します。古い時代の出来事について書かれた古文書だけでなく、家族の記念写真、近況が綴られた葉書、お祭りで流したカセットテープなど様々なものが、歴史的な情報を読み取れるもの、つまり歴史資料となります。

そうした資料から情報を正しく読み取るためには、資料同士の関係性を把握することが欠かせません。そこで重要になるのが、資料の保存場所や並んでいる順序など、「資料がどのようにまとまっていたのか」という情報です。

資料の「まとまり」には意味がある！

皆さんの家の棚や引き出しを思い浮かべてください。どこに何を置くか、どうすれば使いやすいかを考えながら配置していると思います。並べ方にはその人の考え方や個性が出ます。本であれば、大きさで揃えたり、分類で揃えたり、著者別で揃えたりと、色々な方法があります。

同じように、昔の人々も色々な考え方で資料を並べたことでしょう。資料の利用頻度や重要性など、所蔵者にとっての価値観が、資料のまとまりに反映されていると考えられます。資料の並び方、つまり資料のまとまりからは、整理した人の意図を読み取ることができるのです。

資料の「まとまり」からわかること

同じ棚・同じ引き出し・同じ箱に入られている、または一緒に紐で縛られている……などなど、まとまりの種類や範囲は様々です。ひと目でわかるまとまりも多い一方で、一見雑然と置かれているように見えたものが、調べてみると関連する資料だとわかる場合もあります。資料のまとまりを探ることで、関連する資料同士を突き合わせて考察したり、1点の資料だけではわからなかった情報を得たりすることができるのです。なぜ一緒にまとめられているのか、なぜこの方法で保管されているのかを探ることは、1点の資料が持つ情報を調べることと同様に重要なことなのです。

また、資料が保管される中で、整理されるのは一度とは限りません。現在まで伝えられてきた資料の多くは、過去にもたびたび人の手で整理がされてきました。資料のまとまりは、長い年月をかけて変化してきたのです。その過去の整理の痕跡が、資料のまとまりには残されています。

■資料の一例



資料には様々な種類があります。1点だけではわからないことが、他の資料と組み合わせるとわかることもあります。

所蔵者

■まとまりのできかた



現代の私たちが整理するように、これまでの持ち主もそれぞれの考え方で持ち物を整理してきました。

■保管方法の変化



■所蔵者の変化



資料のまとまりは、様々な変化に影響を受けて変わっていきます。

「どのように残されてきたのか」を調べる

過去に行われた整理やその意図を尊重し、現在のままとりの状況を詳しく記録する作業を「**現状記録**」といいます。

資料のまとまりが持つ情報は、調査のために資料を取り出すだけで失われてしまいます。そのため、資料1点1点を取り出して調べる前に、現在の状態を詳しく記録する必要があります。まず資料が現時点でどのように保管されているのかを正確に記録し、資料のまとまりそのものを分析できるようにするのです。

加えて、調査後にどのように資料を保管するかを考える際にも、現状記録は役立ちます。記録したまとまりの情報から、これまでどのように資料が扱われていたか、何のために伝えられたもののかなどがわかれば、今後の保管の方針を考える手がかりになるからです。

つまり現状記録を行って調査時点の資料のまとまりを記録することには、

- ・資料がまとまりとして持っている情報を得る
- ・資料がたどってきた歴史を知り、将来の保存を考える手がかりとする

この二つの大きな意義があると言えます。

■まとまりから考えられること



現状記録の方法

現状記録は、資料1点1点を調べる前に行う最初の作業です。今後資料を取り扱う人が参考にできるよう、客観的に見てわかりやすい記録が必要です。

- ・どこになにがあるか
- ・どのような状態か
- ・サイズと量
- ・過去の調査の痕跡
- ・観察してわかったこと

など、写真やスケッチ画、文字を使って記録します。

ここからは、砂川町の砂川家での調査を事例に、現状記録の方法を実際の調査記録と共に解説します。



現状記録で使用する主な道具

砂川家文書

砂川家（近世は村野家）は、近世では砂川村名主や拝島村組合大惣代^{おおそうだい}、近代では北多摩郡長などを務めました。そのため現在に至るまで、近世以降の立川や多摩地域に関わる行政文書を多く残しています。また砂川家には民具や写真、個人的な興味関心で集められた書籍など、幅広い資料があります。これらの資料全体を砂川家文書と呼んでいます。

砂川家文書の調査はこれまでも何度か行われていましたが、新編立川市史の編さん事業にあたり改めて調査を行ったところ、蔵の中から数多くの新たな資料が発見されました。現在も調査と整理を継続しています。

カメラ：コンパクトカメラやスマートフォンなど、現場でも使いやすいカメラを使います。記録用の撮影のため、必ずしも最新の性能である必要はありません。

筆記用具：記録用紙の他、メモやふせん^{ふせん}に使う用紙、スケッチに使うノートなどを用意します。インクが付く恐れがあるペン類は避け、2Bなど柔らかめの鉛筆を使います。

メジャー：資料が入っている家具や容器（たんすや長持など）のサイズのほか、部屋の広さも計測します。

薄葉紙：非常に薄く、やわらかく、大きな紙で、保護紙として梱包材にも使われます。資料にダメージを与えにくいため、資料調査の現場で使う機会の多い紙です。資料を包んだり、こより状にして紐代わりに使ったりします。

▶▶▶現状記録の方法



1 全体像の把握

現状記録では、資料が納められている場所（倉庫や蔵など）を一番大きなまとまりとして扱います。このときは最初に建物全体の構造や部屋の様子を把握するため、部屋や棚の寸法を計測し、家具や棚の配置などを記録しました。



2 資料の位置の把握

次に資料のまとまりの位置関係を記録します。大きな資料のまとまりから小さなまとまりの順に記録していきます。このときは右の写真のようにたんす全体を記録した上で、一つ一つの引き出しを確認しました。容器などが積み重なっている場合も、まずそのまとまりを記録した上で、容器の中身を一つずつ確認しました。



3 まとまりに番号を付ける

まとまりを把握しながら、その関係がわかるように番号を付けていきます。このときはまとまりに付けた番号を記入した用紙と資料のまとまりを一緒に撮影し、記録しました。



4 資料の運び出し

見つけた資料は、さらに詳細な記録をとるため、そのまとまりを崩さないように保管場所から運び出します。

このときは資料を木箱や引き出しなどの容器ごと蔵から運び出しました。床や棚の上などに直接積み重ねられていた資料は、そのまとまりや並び順をなるべく崩さないように注意して、別途用意した箱に入れたり、薄葉紙に包んだりして運び出しました。



5 一点ごとの確認

保管場所から運び出した資料には、まとまりの中で重なっていた順番にしたがって、1点ごとに番号を付けます。このときは番号を記入した中性紙の封筒に資料を入れました。調査終了後に資料をもとの容器に戻せるよう、封筒ではなく、短冊状に切った中性紙や薄葉紙に番号を記載して、資料に挟み込む場合もあります。

まとまりの関係を反映したこれらの番号を基に、目録作成を行います。

→目録の作成については『たちかわ物語』vol.5 4～5頁を参照



資料の配置場所や形状、位置関係などがわかるように、撮影やスケッチなどで十分に記録を残します。また、他の人が後から見ても配置場所と資料の照合ができるように、写真と位置関係のメモを元に見取り図を作成します（見取り図については12頁参照）。

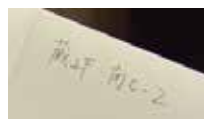


右の蔵3F-西4-2という番号は、内蔵3階の西側の壁面の4番目の棚の2個目の引き出しという意味です。箱書きのように容器自体に情報が記載されている場合もあるので記録しておきます。



この時運び出した段ボール箱には、風呂敷包みの他に古い新聞紙やノート、記念品も一緒に入っていました。重なり方や並び順が崩れないように注意して、どんな資料があるか確認しながら、スケッチも行い状況を記録します。

資料1点1点の内容を見ながら封筒に入れていきます。封筒には保管されていた場所を示す番号の次に、並び順を示す番号を記入しています。



memo.1 | 万能な記録方法はない

デジタルカメラやスマートフォンなどの普及によって、誰でも手軽に撮影ができ、膨大な量の写真や動画を残せるようになりました。そのため現状記録もフィルムカメラなどを利用していた頃に比べると容易になっています。

しかしどんなに技術が進歩しても、写真や動画だけでは伝わりにくい情報はあります。記録の情報量は多ければ良いという訳ではなく、わかりやすさや確認のしやすさなども重要です。記録方法にはそれぞれに長所と短所があります。

撮影のみに頼るのではなく、スケッチや所蔵者への聞き取りなども組み合わせて記録することが大切なのです。



memo.2 | 調査は臨機応変に

市史編さん室では、調査を行う際に、あらかじめ所蔵者の方のご都合やご事情を伺います。そしてそれに基づいて、どれくらいの時間や人数をかけて、どのように調査ができるのかを計画します。

今回紹介した事例は、市史編さん室が行ってきた調査の中でも特に規模が大きく、蔵全体の現状記録を行いました。ほかにも、蔵の中の一つの棚だけを調査する場合や、包みや箱一つを調査する場合などもあります。

調査の条件は様々ですが、ここまで紹介してきた考え方に沿って、可能な範囲で適切にまとまりの情報が残せるよう、心がけて取り組んでいます。



おわりに ～未来に残す地域の歴史～

個人の家で所蔵する資料には、それぞれの家にとっての整理の仕方と価値があります。今回ご紹介した現状記録を含む資料調査では、資料を現在に残してきた人たちの「思い」を尊重するように心がけています。

立川市に住む一人ひとりの歴史を調べることは、地域の歴史やより大きな歴史を知る第一歩となります。同時に地域の資料を未来に残していくことも、市史編さん事業の重要な使命であると考えています。そのためには立川市にお住まいの皆様のご協力が欠かせません。引き続きご理解とご支援をいただきますようお願いいたします。

資料を残し、活かし、未来に伝える 監修・近世部会部会長 富善一敏

古文書をはじめとする資料のまとまりには、古文書を伝えてきた家や団体の歴史を明らかにする際に欠かせない多くの情報が残されています。

1980年代までは、古文書の現物を年代や主題で仕分けして整理する方法が一般的でした。しかしながら、古文書を残された代々の方々はご自身で古文書を整理されることが多く、現在の整理者の都合で仕分けしてしまうと、包紙や袋などに残されたその手がかりが見えなくなることがあります。古文書を整理し保存し伝えてきた人びとの思いを尊重したいとの反省から生み出されたのが、ここで紹介した現状記録の方法です。

江戸時代後期の文化10年（1813）に、信濃国諏訪郡^{おつこと}乙事村（現長野県諏訪郡富士見町）では、従来年々交代する名主の間で引き継がれてきた村の共有文書を再整理し、その成果を2冊の文書目録帳にまとめ、「帳蔵」（文書保管庫）を建て収納しました。帳蔵の設立趣意書には、帳蔵は「実一村の幸尽、万代不易の礎」「永世の宝蔵」であり、そこに納められた文書は「諸帳面その外、疎略に致すべからず候、半紙一行の書き付けにても千金に替え難く候」との文言があります。この文言にあるように、古文書は先人の残し伝えようとする意思により残され、現代に伝えられてきました。

私たちもこうした先人の営みに学び、立川市域の人びとが残した古文書などの地域資料を残し、活かし、未来に伝えていきたいと思ひます。皆様からの情報をお待ちしております。



▲熊本県天草での資料調査風景(2003)

資料をよむ

—砂川家文書からみる戊辰戦争—

近代部会編集委員 宮間純一



はじめに

慶応4年（1868）正月3日に勃発した鳥羽・伏見の戦い以来、約1年半におよぶ内乱が繰り返された。この内乱は、戊辰（ぼしん／つちのえたつ）の年に始まったことから戊辰戦争あるいは戊辰内乱と呼ばれる。

戊辰戦争は、慶応3年12月9日のクーデター（王政復古の政変）で発足した王政復古政府と旧幕府勢力による覇権争いの結果発生した軍事闘争であった。だが、この内乱は武士や公家といった支配者層だけではなく、あらゆる身分の人びとを巻き込んで展開した。各地の民衆は、新政府・旧幕府の双方から協力を要請され、金品・人員の供出を求められた。なかには戦場となり、焦土と化した町や村もあった。

小稿では、近代部会の調査によって発見された史料から、戊辰戦争期の地域のありさまを紹介したい。



多摩の戊辰戦争

武蔵国多摩郡は、江戸からほど近い場所に位置していることもあり、内乱の影響をおおいに受けた。慶応4年2月上旬、江戸から甲府に向けて進軍しようとする旧幕府の歩兵数百名が、青梅街道・甲州街道沿いの村々に出現している。2月6日には府中宿に歩兵約700名が現れ、つづいてさらに420名ほどが到着した。歩兵たちは、質屋などから金品を強奪し、その後さらに軍を進めた。日野宿では、鉄砲に玉を込めて、住民たちを威嚇しながら押し通っている。八王子宿でも宿役人から脇差を奪うトラブルを起こした。

3月に入ると、中山道を東に進んできた新政府軍が甲府城をおさえ、東海道からも新政府軍が江戸へ迫ってきた。これに対して、新選組の近藤勇らが江戸から甲府へと向かい、勝沼宿（現山梨県甲州市）で戦闘が発生した。日野宿名主で新選組の支援者であった佐藤彦五郎率いる農兵が、近藤らの部隊に協力したことはよく知られている。

さらに、4月11日の江戸開城以降、新政府への恭順に不満をもつ旧幕府勢力が関東の各地に脱走した。脱走兵たちは、軍事行動に必要な資金・物品を備えていない。そのため、村々から金品・人馬を調達しようとした。多摩地域には、そのような脱走兵の活動の痕跡を示す記録がのこされている。たとえば、上野の彰義隊と分派した渋沢成一郎（栄一の従弟）率いる振武軍は、田無村に拠点を置き（その後、振武軍は高麗郡飯能に移動）、近隣の村々に資金の供出を指示した。

こうした緊迫した状況下にもかかわらず、多摩地域の多くの村々は領主による保護が期待できない状態にあった。無政府状態にあるなかで、村々は自衛のための対策を講じなければならなかった。そのため、各村の村役人たちは戦況に関する情報を収集・交換し、事態の把握に努めようとしている。事件が起きた際には連携して対応にあたった。



精勇隊事件

砂川村の村役人であった砂川家には、同村の北東部に位置する入間郡所沢村（現埼玉県所沢市）で発生した精勇隊事件に関する文書が伝わっている。

精勇隊は、「稲田様御附属」を名乗り、慶応4年5月頃から所沢村を根拠地として活動した部隊である。「稲田様」とは、徳島藩主蜂須賀家の家老で洲本城代を務めた稲田氏のことで、戊辰戦争では新政府軍の一翼を担った。精勇隊については不明な点も多いが、この部隊が所沢村の名主助右衛門を捕らえて江戸に送ったことにより、同村のほか近隣の村々にも衝撃が走った。

図1は、砂川村の名主砂川源五右衛門が執筆したと思われる事件の顛末書の下書きである。作成年月日を欠いているが、記載内容から8月以降に執筆された文書であることはたしかである。この史料にそって、事件の経緯を説明すると次のようになる。

5月、上新井村（現所沢市）の名主新助の案内で、侍のような格好をした者が4、5名所沢村にやってきた。彼



▲図1 精勇隊事件関係文書〔部分〕(砂川家文書 内蔵3F-西4-13-3-31-2-8 砂川家所蔵)

武州入間郡所沢村名主助右衛門当六月中稻田様御附属精勇隊江御召捕相成候処東京江御引立之処同御隊柏尾嘉平治様御扱二而御〔取調之上差免相成其後所沢村屯集之右隊掛川様御人数二而〔兵隊被捕御差押相成同八月中右助右衛門外三人民政御裁判江御呼出し之上江調局江御引渡相成候始末〔差当り左二奉申上候〕

一此段精勇隊之義者当五月中〔下新井村名主新助案内二而侍体之者四五人〔連参り申聞候者我等義者田安殿御附属商民撫育隊与唱候者二付宿所貸呉候様申談候二付葉王寺与寺江案内いたし留置〔老ヶ所貸遣し〕候処追々人数相増然る処脱走人通行之節も一向もいたし候而も不差構二付七十人余二相成上野御打入之後者稻田藩精勇隊与号し近隣郷村々公事訴訟相聴き取調所々金作〔強誘等いたし候二付名主助右衛門二においても不審二存用回等申付候而も〔陸々不取用候故□□相成助〕 故六月中同人を召捕〔夜中〕神田三馬町家主長二郎与申者之宅江引連参り候処同人宅二において柏尾〔右嘉平治様被申□〔札二付〕御調二付之処鐘々〔別紙之通〕相答申上候処親組村役人江御引渡相成帰村いたし候処〔然る処〕同十五日掛川様御人数御打入二而右隊之者五十名入御差押江調局江御差置相成申候今以御謹慎中与申事二御座候

一当八月〔名主助右衛門年寄半平勘左衛門組頭孝作民政御裁判所方御差紙二付罷出候処江調局江御引渡相成其後半平外式人者出牢助右衛門并弟俊三郎者未だ江調局二罷在候義二有之然〔然ル〕処半平外式人者中立事実与者相違いたし且上新井村名主市右衛門与申者周旋いたし六月上旬所沢村組合之内式拾三ヶ村連印二而精勇隊江難有金穀差出候様書面差出候趣二候得者右村々之者一向不相弁〔者多分有之〕 全市右衛門之奸計与奉存候尤右等之義者当月上旬参謀方〔参謀方出張与申風聞有之候得者〕之何方之御仁二候哉六人程御出張二而悉々御調相成分明二相成然る処昨日〔写を以〕差上候歎願書可差出□□義付〔 〕〔右市右衛門申越組合村々□□者〔役人共〕申候者此上又候精勇隊二出兵被致候而者村々難渋二付〔与申し〕調印相拒ミ候処左候得者助右衛門〔老〕難渋〔義〕可致候間一ト先調印助右衛門御下ケ之上者又々何とか致方も可有之□一決調印いたし候義二可被成此段御尋二付〔荒増〕奉申上候〔後略〕

*は抹消、〔〕は挿入、□・□は判読不能文字、□は一字、□は字數不明。

らは、田安徳川家^{たやす}附属の「商民撫育^{しょうみんぶいく}」のための隊であると名乗り、宿所を貸すようにと申し入れてきた。これに対して、村側が寺を一つ貸したところ、徐々に人数が増えて70名あまりにまでふくらんだ。

彰義隊が壊滅した上野戦争の後には、「稲田藩精勇隊」と称するようになった。精勇隊は、近隣村々の公事訴訟について独自に取調を行い、農民に対して強引な金策を始めた。精勇隊は、名主助右衛門に用向きを申しつけたが、助右衛門は要求を受け入れなかった。結果、助右衛門は捕らえられ、神田三島町（現千代田区）の長三郎という者の屋敷に送られた。精勇隊のリーダーである柏尾嘉平治が助右衛門を問いただした後、助右衛門は親組の村役人に引き渡されて帰村した。しかし、その後の6月15日、新政府軍の掛川藩の兵が精勇隊の屯所^{とんじょ}に打ち入って51名を差し押さえた。捕縛された者は、新政府のもとにおかれた糺問局^{きゆうもんきょく}（罪状を問いただすための機関）にて謹慎処分とされている。

砂川家と精勇隊事件

事件は、これで完結せずその後も尾を引いたことが9頁の文書翻刻の後半部分からわかる。8月に助右衛門とその弟俊三郎のほか、所沢村の年寄半平・勘左衛門および組頭孝作が、事件の捜査のため民政裁判所の呼び出しを受けて糺問局に引き渡された。ほどなく半平ら3名は釈放されたが、助右衛門と俊三郎は半平らの供述内容と相違する点があったことから糺問局に留め置かれた。

問題となったのは、所沢村組合のうち23か村が精勇隊に金穀を提供した経緯である。精勇隊は、稲田藩の附属部隊であると称していたが、新政府の正規軍でなかったことは明らかである。旧幕府方の勢力であった可能性すら否定できない。あるいは、そのどちらでもなく、混乱に乗じて金穀を集めようとした浮浪人の集団であったのかもしれない。『所沢市史 下』（所沢市、1992年）では、「戊辰戦争の推移のなかで官軍附属隊を名乗りながら、権力の空白期に成立した浮浪隊」と評価されている（14頁）。いずれにしても、新政府は精勇隊を問題視しており、村々がどのように精勇隊に協力したのかを確認しようとしていた。村々の側からみれば、みずからの罪も問われかねない問題だと捉えられたことは想像にかたくない。

源五右衛門や砂川村は、事件の当事者ではなかったが、近隣村の有力者であったことから、新政府の機関（おそらく蕪山県）による事実関係の尋問に応じてこの文書を作成したと思われる。なお、源五右衛門は助右衛門の親類であったこともあり、この件に関する相談にのっていた。23か村の人びとは事情をよく弁えないままに連印にてありがたく金穀を差し出す旨の書類を提出しただけで、実態は上新井村の名主「市右衛門」（史料には上新井村名主として「新助」「市右衛門」の2名が出てくる）の「奸計」によるものだとの見解を示している。さらに、精勇隊が再び出兵することがあっては「村々難渋」との村々の意思も記されている。この言い分が正しいかどうか、本史料だけでは確定できないが、文書の作成者は金穀を出した村々の意向をくんだ上で、助右衛門らを擁護する立場をとる。また、精勇隊が新政府の意に背き、罪を犯した集団であるとみなしている。この下書きでは、最初の段階で記された柏尾への敬称「様」が削除されていることにその意識が現れている。罪人に敬称を付けては問題視される可能性があるとの判断から抹消したのであろう。

むすびにかえて

戊辰戦争は、政治史上の画期となった内乱であるが、地域にのこされた史料からは百姓たちにとっても他人事ではなく生活・生存にかかわる一大事件であったことがわかる。砂川家文書にある精勇隊事件の関係文書は、その一コマを示すものであり、動乱の時代における村々の苦悩がうかがえる。

参考文献

所沢市史編さん委員会編『所沢市史 下』（所沢市、1992年）

『里正日誌 第十巻』（東大和市立郷土博物館、1996年）

松尾正人「多摩の戊辰戦争―仁義隊を中心に―」（同編『近代日本の形成と地域社会』岩田書院、2006年）

宮間純一「一八六八年の「政権交代」と多摩地域―蓮光寺村富澤政怒の日記から―」（『多摩のあゆみ』178、2020年）



▲図2 精勇隊に関わる所沢村・砂川村の位置
— 五街道 — その他の街道



令和6年4月～令和6年9月活動報告

月	日	活動内容
継続調査		近世部会・近代部会・砂川町砂川家調査
		近代部会・立川市歴史民俗資料館調査
4月	19日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	25日	近代部会・西東京市中央図書館調査
	28日	古代・中世部会・江戸東京たてもの園調査
	30日	古代・中世部会・江戸東京たてもの園調査
5月	1日	古代・中世部会・江戸東京たてもの園調査
	13日	近世部会・近代部会・現代部会・西砂町個人宅調査
	17日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	25・26日	歴史学研究会大会出展（於青山学院大学）
	26日	日本考古学協会大会参加（於千葉大学）
6月	1日	第1回・近代部会会議
	3日	近世部会・若葉町個人宅調査
	15日	第1回・現代部会会議
	21日	現代部会・特定部会会議

月	日	活動内容
6月	21日	近世部会・立川市歴史民俗資料館調査
	21日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	23日	多摩地域史研究会参加（於東京都埋蔵文化財センター）
7月	6日	第1回・近世部会会議
	7日	第1回・民俗・地誌部会会議
	6・7日	日本動物考古学会資料発表（於東北芸術工科大学）
	18日	立川市シルバー大学講座での発表
	19日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	25日	第22回編集委員会議
8月	2日	第18回編さん委員会会議
	27日	第2回・現代部会会議
	29日	現代部会・特定部会会議
9月	上旬	古代・中世部会・三光院・徳蔵寺調査
	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	27日	『資料編 柴崎の民俗（第2刷）』刊行



令和6年度市史編さん関連展示・講演会のお知らせ

今年度の関連企画では、今回の市史編さん事業で新たに収集した資料を元に、昭和期以降の立川市にスポットを当てた企画を準備中です。

展示「写真展 昭和から令和へ…まちの鼓動と変貌」（仮）※会期①・②の展示内容は同一です

①令和7年2月20日（土）～28日（金）立川市役所1F多目的プラザ

②令和7年3月1日（土）～14日（金）（9日を除く）たましんRISURUホールギャラリー

講演会「立川市のまちづくり」（仮）

令和7年3月2日（日）12時開場・13時開始（予定）たましんRISURUホール小ホール

【講師】沖川伸夫（中央大学法学部兼任講師・現代部会部会長）

金子 淳（桜美林大学リベラルアーツ学群教授・現代部会副部会長）

松本洋幸（大正大学文学部教授・現代部会編集委員）

詳細は順次、立川市HPなどでお知らせしてまいります。

市史編さん室では、引き続き写真や古文書など、むかしのことがわかるものを探しています。心当たりのある方は市史編さん室までお知らせください。

市史編さん広報紙 **たちかわ物語** vol.18

令和6年（2024）9月20日発行

発行 立川市

〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

編集 産業文化スポーツ部市史編さん室市史編さん係

〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201

TEL (042) 506-0021 / FAX (042) 525-1601

E-mail chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp

URL <https://www.city.tachikawa.lg.jp/kanko/bunka/1003076/index.html>

印刷 りょうせいデジタル株式会社

〔市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています〕



市史編さんHPはこちら
からアクセスできます。

「観察」からわかること 現状記録とスケッチ画

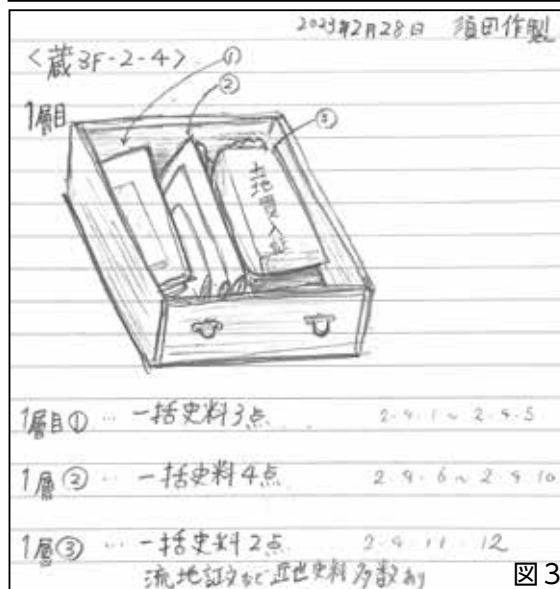
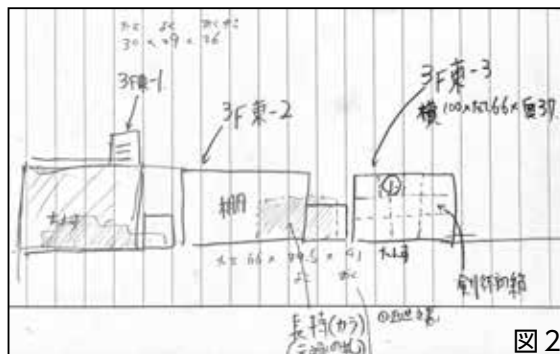
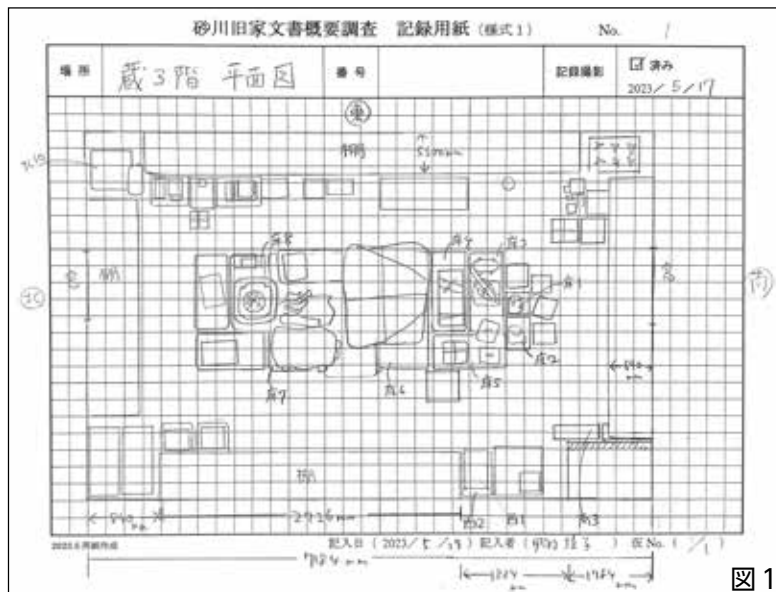


図1～3：砂川家調査で実際に作成した記録用紙とスケッチ画とメモ（一部画像の加工あり）。

記録用紙やスケッチ画には調査件名、調査を実施した場所や日付、記入者名、通し番号など、統一的に記入する項目を事前に設定しておきます。

興味があるものや、重要そうな箇所だけを調べるのではなく、網羅的に、順番に観察し、記録していきます。

録音・録画・撮影機能や記録容量の向上により、今では大量の情報を記録することが容易になりました。しかし技術の進歩に関わらず大切なのが「実際に実物を観察する」という作業です。

図1は砂川家の現状記録調査にあたって作成した記録用紙の1枚です。調査時に撮影した写真やメモを元に、蔵の中がどのような状況であるか、どこにどのような資料があるかなど、方眼紙状の用紙にスケッチの形で記録しています。全体像がわかるよう、この平面図と同じ様式で東西南北の壁面の図を作成し、異なる角度から見た記録も残しています。図2は蔵の中で資料の配置をメモしたもので、図3は蔵から運び出した引き出しの様子をスケッチしたものです。後ろに隠れていたり積み重ねられていたりしている資料の見落としがないようよく観察し、写真だけでは記録しにくい、資料同士の位置関係をたまかな資料内容とともにメモに残しています。

いずれのスケッチ画も、現地での写真撮影などと並行して作成しており、実物を観察して注目した点や気づいた点などを書き込んでいます。あらかじめ記入する項目や手順を決めておくことで作業をスムーズに行える上、後から見た人にもわかりやすい記録を残せることが大きな利点です。このような手順は立川市史編さん以外の現場でも用いられている方法を踏襲しており、歴史学やアーカイブズ学における長年の経験が生かされています。

写真や動画として記録を残すことも大切ですが、一方ではその場で観察し、スケッチなどの形で情報をその場で取捨選択して記録することも大切なのです。

刊行物好評発売中！

新編立川市史刊行物は各種好評発売中です。

頒布場所：立川市役所本庁3階市政情報コーナー、立川市歴史民俗資料館、オリオン書房ノルテ店、ジュンク堂書店立川高島屋店

新編立川市史 資料編



先史

古代・中世

近世1

近代2

現代1

柴崎の民俗

砂川の民俗

地図・絵図

写真集

B5判・カラー口絵8ページ・本文602ページ・上製本・価格3,500円

B5判・カラー口絵16ページ・本文604ページ・上製本・価格2,500円

B5判・カラー口絵16ページ・本文604ページ・上製本・価格2,500円

B5判・カラー口絵8ページ・本文580ページ・上製本・価格2,500円

B5判・カラー口絵4ページ・本文579ページ・上製本・価格2,500円

B5判・カラー口絵8ページ・本文535ページ・上製本・価格2,500円

B5判・カラー口絵8ページ・本文549ページ・上製本・価格2,500円

A4判・フルカラー・190ページ・上製本・DVD付・価格3,000円

A4判・フルカラー・367ページ・上製本・価格4,000円